

子どもの集団構成におよぼす玩具の役割 (2)

—発達の考察を中心に—

研究第8部 星 美智子・湯川 礼子

I 目 的

本研究は、子どもの集団構成に影響する玩具の規定性を検討し、保育の場で玩具を活用するための基礎資料をうることを目的とする。前年度は、5歳児を被験児として実験をおこない、玩具の特性によって集団構成が変化

することをみることができた。今年度は、3歳児・4歳児を対象としての実験結果から、昨年度の結果を再検討しながら、年令的発達による考察をすすめたいと思う。

II 方 法

(1) 手続き

1) 5名を1組とし、4歳児、3歳児各5組づつの編成をつくる。メンバーの組合せは無差別とする。

2) 各編成組ごとに、《ボール》・《ひも》・《床上積木》・《玩具なし》と玩具を変えて4回の実験をおこなう。1回は10分間で、各回は継続して施行することを避ける。

(2) 実験材料

《ボール》(3個)、集団構成に流動的の刺激を与えるものとして選択。

《ひも》(5m1本)。集団構成に連鎖的の刺激を与えるものとしてとりあげる。

《床上積木》(フレーベル積木一箱)。集団構成に結合的の刺激を与える玩具として選択。

《玩具なし》他の玩具との対照条件として、また集団構成を分散させやすいものとして、玩具を与えずに遊ばせる場面をつくる。

(3) 観察記録

実験者2名。1名はひとりの子を追って行動観察をおこない、他の1名は全体の集団構成の変化を観察し、60秒経過ごとにその時点における子どもの位置と玩具の関係を図示していく。

(4) 被験児

東京都T保育園の園児。当研究所ナースリー・ルームの幼児。延人数3歳児25名、4歳児25名、5歳児50名。

なお、実験の方法の詳細は、昨年度の当研究所紀要第5集を参照されたい。

III 結 果

1. グループの形態

1) あそびの形態

子どものあそびを、「協同あそび」「平行あそび」「ひとりあそび」「ふざけ他」(ふざける、おしゃべり、けんか、かけまわる、手をつないで歩くなど)、「他の子のあそびを傍観」の五つに分類した。この五つの形態に従って、子どもひとりひとりの60秒ごとの行動記録を分類する。ひとりの子について各課題10回、4課題で40回の行動がチェックされる。これを年令別、課題別に集計すると第1表、第1図になる。

まず、3歳児のあそびについてみる。3歳児が協同してあそんでいるものは、《ひも》がもっとも多く(44%)、つぎに《玩具なし》(34%)である。《積木》がもっとも少なく15%にすぎない。他に目立つことは、《積木》にひとりあそびが多い(44%)こと、また、うまくあそべないでふざけたり、けんかをしているものが、《ボール》(40%)、《玩具なし》(38%)に多いことである。

4歳児についてみると、協同あそびは3歳児とおなじように《ひも》が一番多く(60%)、つぎに《玩具なし》である。しかし《ボール》や《積木》も30%近く協同あ

第1表 あそびの形態 ()%

3 歳	協同	平行	孤立	ふざけ他	傍観	計
ボール	57 (22.8)	23 (9.2)	50 (20.0)	99 (39.6)	21 (8.4)	250 (100.0)
ひも	109 (43.6)	74 (29.6)	1 (0.4)	43 (17.2)	23 (9.2)	250 (100.0)
積木	38 (15.2)	57 (22.8)	111 (44.4)	28 (11.2)	16 (6.4)	250 (100.0)
なし	86 (34.4)	49 (19.6)	5 (2.0)	95 (38.0)	15 (6.0)	250 (100.0)
計	290 (29.0)	203 (20.3)	167 (16.7)	265 (26.5)	75 (7.5)	1,000 (100.0)

4 歳	協同	平行	孤立	ふざけ他	傍観	計
ボール	75 (30.0)	78 (31.2)	26 (10.4)	21 (8.4)	50 (20.0)	250 (100.0)
ひも	120 (60.0)	33 (16.5)	0 (0)	27 (13.5)	20 (10.0)	200 (100.0)
積木	65 (26.0)	62 (24.8)	102 (40.8)	9 (3.6)	12 (4.8)	250 (100.0)
なし	84 (33.6)	66 (26.4)	8 (3.2)	69 (27.6)	23 (9.2)	250 (100.0)
計	344 (36.2)	239 (25.2)	136 (14.3)	126 (13.3)	105 (11.0)	950 (100.0)

5 歳	協同	平行	孤立	ふざけ他	傍観	計
ボール	83 (20.8)	133 (33.2)	47 (11.7)	89 (22.3)	48 (12.0)	400 (100.0)
ひも	269 (54.5)	67 (13.5)	11 (2.2)	108 (21.9)	39 (7.9)	494 (100.0)
積木	265 (53.0)	80 (16.0)	92 (18.4)	49 (9.8)	14 (2.8)	500 (100.0)
なし	207 (41.4)	71 (14.2)	21 (4.2)	173 (34.6)	28 (5.6)	500 (100.0)
計	824 (43.5)	351 (18.6)	171 (9.0)	419 (22.1)	129 (6.8)	1,894 (100.0)

びの五つの形態の分散について、3歳児と4歳児、4歳児と5歳児にそれぞれ比率の差があるかどうかを課題別に χ^2 検定をおこなった。その結果は、下記のように、《ひも》の4歳児と5歳児には有意の差はないが、《玩具なし》の3歳児と4歳児が5%有意水準、その他はすべて、5%以下の有意水準で差があるといえる。

《ボール》

	協同	平行	孤立	ふざけ他	傍観	計
3 歳	57	23	50	99	21	250
4 歳	75	78	26	21	50	250

0.001 > P

	協同	平行	孤立	ふざけ他	傍観	計
4 歳	75	78	26	21	50	250
5 歳	83	133	47	89	48	400

0.001 > P

《ひも》

	協同	平行	孤立	ふざけ他	傍観	計
3 歳	109	74	1	43	23	250
4 歳	120	33	0	27	20	200

0.001 > P

	協同	平行	孤立	ふざけ他	傍観	計
4 歳	120	33	0	27	20	200
5 歳	269	67	11	108	39	494

0.80 > P > 0.70

《積木》

	協同	平行	孤立	ふざけ他	傍観	計
3 歳	38	57	111	28	16	250
4 歳	65	62	102	9	12	250

0.005 > P > 0.001

	協同	平行	孤立	ふざけ他	傍観	計
4 歳	65	62	102	9	12	250
5 歳	265	80	92	49	14	500

0.001 > P

《なし》

	協同	平行	孤立	ふざけ他	傍観	計
3 歳	86	49	5	95	15	250
4 歳	84	66	8	69	23	250

0.05 > P > 0.025

	協同	平行	孤立	ふざけ他	傍観	計
4 歳	84	66	8	69	23	250
5 歳	207	71	21	173	28	500

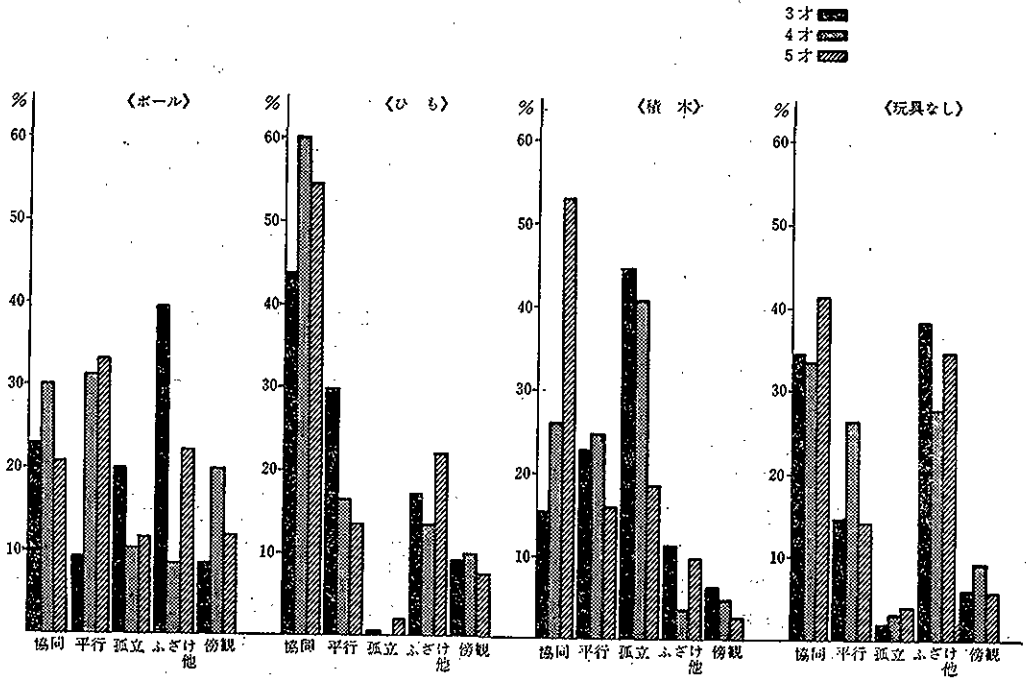
0.001 > P

そびがなされている。この他では、平行してあそぶのは《ボール》に多く(31%—3歳は9%)、ひとりあそびは3歳児と同様《積木》(41%)が際立って多く、《積木》以外の課題ではひとりあそびは10%をこえない。

5歳児では、協同あそびをみると、《ボール》の21%を除き、《ひも》(55%)、《積木》(53%)、《玩具なし》(41%)と半数前後の子どもが協同のあそびをしている。平行あそびでは《ボール》(33%)にだけ多くみられる。4歳児も《ボール》が平行あそびの一位であるが、4歳児は他のあそびも平行あそびが多い。5歳児のひとりあそびは全体的にみて、4歳・3歳よりずっと少なくなっている。

以上ざっとみても年齢によっての特徴をみられるが、客観的な検討を χ^2 検定によって試みた。すなわち、あそ

第1図 課題別あそびの形態



さらに、各課題ごとに、あそびの形態それぞれについて、年齢による有意の差がみられるかを χ^2 検定によって検討してみる。

《ボール》

	3歳	4歳	5歳	計
協同	57	75	83	215
他	193	175	317	685

0.02 > P > 0.01

	3歳	4歳	5歳	計
平行	23	78	133	234
他	227	172	267	666

0.001 > P

	3歳	4歳	5歳	計
孤立	50	26	47	123
他	200	224	353	777

0.005 > P > 0.001

	3歳	4歳	5歳	計
ふざけ	99	21	89	209
他	151	229	311	691

0.001 > P

	3歳	4歳	5歳	計
傍観	21	50	48	119
他	229	200	352	781

0.001 > P

《ひも》

	3歳	4歳	5歳	計
協同	109	120	269	498
他	141	80	225	446

0.005 > P > 0.001

	3歳	4歳	5歳	計
平行	74	33	67	174
他	176	167	427	770

0.001 > P

	3歳	4歳	5歳	計
孤立	1	0	11	12
他	249	200	483	932

0.02 > P > 0.01

	3歳	4歳	5歳	計
ふざけ他	43	27	108	178
他	207	173	386	766
	0.025 > P > 0.02			

	3歳	4歳	5歳	計
孤立	5	8	21	34
他	245	242	479	966
	0.20 > P > 0.10			

	3歳	4歳	5歳	計
傍観	23	20	39	82
他	227	180	455	862
	0.70 > P > 0.50			

	3歳	4歳	5歳	計
ふざけ他	95	69	173	337
他	155	181	327	663
	0.02 > P > 0.01			

《積木》

	3歳	4歳	5歳	計
協同	38	65	265	368
他	212	185	235	632
	0.001 > P			

	3歳	4歳	5歳	計
傍観	15	23	28	66
他	235	227	472	934
	0.10 > P > 0.05			

	3歳	4歳	5歳	計
平行	57	62	80	199
他	193	188	420	801
	0.02 > P > 0.01			

χ²検定によって、3歳児～5歳児の年齢による差のないものは、《ひも》の「傍観」、《積木》の「傍観」、《玩具なし》の「孤立」と「傍観」の4つだけであるといえる。その他については《玩具なし》の「協同あそび」が5%の有意水準、他はすべて有意水準2%以下で、年齢的に有意の差がみられた。

	3歳	4歳	5歳	計
孤立	111	102	92	305
他	139	148	408	695
	0.001 > P			

以上によって、玩具を変えればあいの遊びの形態が年齢によって異なることが明らかとなったが、どのような違いがみられるかを検討してみる。各年齢によって課題ごとに、どのあそびの形態が多いか、1・2位をあげるつつぎのようになっている。

	3歳	4歳	5歳	計
ふざけ他	28	9	49	86
他	222	241	451	914
	0.005 > P > 0.001			

	3歳		4歳		5歳	
《ボール》	1. 1. 1.	2. 協同	1. 2. 1.	2. 協同	1. 2. 1.	2. 協同
《ひも》	1. 協同	2. 平行	1. 協同	2. 平行	1. 協同	2. 平行
《積木》	1. 孤立	2. 平行	1. 孤立	2. 協同	1. 協同	2. 孤立
《玩具なし》	1. 1. 1.	2. 協同	1. 協同	2. 平行	1. 協同	2. 平行

	3歳	4歳	5歳	計
傍観	16	12	14	42
他	234	238	486	958
	0.50 > P > 0.30			

ここでみると明らかなように、《ボール》は、3歳児は「ふざけこ他」が多い。ボールをうまくつかえず、他の子にとられることになるので、ボールを抱えたままおしゃべりしたり歩きまわったりしている子が多いことが観察されている(結果3、グループ形成過程)。4歳・5歳では「平行あそび」が1位になっている。なお、5歳児のばあい、他の課題ではすべて「協同あそび」が1位であるのに、《ボール》だけが「平行あそび」にとどまっている。

《玩具なし》

	3歳	4歳	5歳	計
協同	86	84	207	377
他	164	166	293	623
	0.05 > P > 0.025			

《ひも》についてみると、3歳・4歳・5歳とも、1位「協同」2位「平行」とまったく同じ傾向である。も

	3歳	4歳	5歳	計
平行	49	66	71	186
他	201	184	429	814
	0.001 > P			

もちろん、おなじ「協同あそび」でも、3歳児と5歳児にはかなり質的ながいがみられるが、「ひも」は3歳児でも一応「協同あそび」ができるといえる。3歳児は「ひも」以外の課題では「協同あそび」が1位のものはない。

《積木》のばあいには、3歳・4歳・5歳と年齢が高くなるにしたがって、あそびの発達段階が明らかである。つまり、3歳児は「ひとりあそび」が多く、つぎ「平行あそび」、4歳児は1位「ひとりあそび」、2位「協同あそび」であり、5歳児では1位が「協同あそび」で2位が「ひとりあそび」になっている。

《玩具なし》では、3歳児が1位「ふざけ他」2位「協同」で、4・5歳はともに「協同」「平行」が1・2位になっている。《玩具なし》は、《ボール》と同じように、3歳児のあそびが幼なく、4・5歳児との差が明らかである。

2) グループの構成人数

つぎに、「協同あそび」について、何人のグループであそばれているか、それが課題によって、また年齢のちがいでによってどのような変化があるかをみてみたい。第2表は、「協同あそび」の個々のグループを構成人数別にまとめたものである。《ボール》では5歳児に5人グループがみられるが、3・4歳児ではみられない。3歳児・4歳児のグループ数が5歳児より多いが、これはあとの「結果2.あそびの継続」と照合してみると、年齢の小さいグループは短時間のあそびのため頻数が多くなっているといえる。《ひも》は、各年齢ともまったく同じ傾向で4~5人グループが多くなっている。《積木》では、3歳・4歳の2人グループが60~70%であるのに比し、5歳児は44%であり、年齢が高くなるにつれて人数の多いグループあそびが増加している。《玩具なし》は、5歳児は2~5人グループそれぞれに分散しているが、3歳は5人グループが殆んどである。4歳児は5歳児と3歳児の中間の傾向をもっている。《玩具なし》と《ひも》が、年少の方に5人グループの率が高くなるのは、「結果3.グループ形成過程」の質的分析における年長と年少とのちがいが数的にあらわされているとみることができ

2. グループの変動

構成されたグループの変動を時間的経過からさぐり、グループ継続の年齢差を検討する。ここでは個人の行動観察から、実験制限時間(10分間)内に一番長い時間継続してあそんでいた状態をとりあげ、課題別に各組の平均継続時間(最長継続時間の平均)をみた。3歳児と5歳児によって年少・年長の差をみると、第3表になる。第

第2表 協同あそび人数構成

3 歳	ボール	ひ も	積 木	な し
2 人	83.3%	3.8%	68.8%	5.6%
3 人	16.7	23.1	25.0	0.0
4 人	0.0	15.4	6.2	5.6
5 人	0.0	57.7	0.0	88.8
	100.0	100.0	100.0	100.0
グループ数	48組	52	32	36

4 歳	ボール	ひ も	積 木	な し
2 人	85.7%	13.8%	60.0%	28.6%
3 人	14.3	0.0	24.0	14.3
4 人	0.0	31.0	12.0	4.7
5 人	0.0	55.2	4.0	52.4
	100.0	100.0	100.0	100.0
グループ数	70組	58	50	42

5 歳	ボール	ひ も	積 木	な し
2 人	92.0%	8.8%	43.9%	32.2%
3 人	0.0	19.1	35.2	25.8
4 人	0.0	39.7	6.6	17.8
5 人	8.0	32.4	14.3	24.2
	100.0	100.0	100.0	100.0
グループ数	37組	68	91	62

第3表 あそびの継続時間

		ボール	ひ も	積 木	な し
3 歳	平均時間	1分24秒	3分12秒	5分24秒	2分36秒
	指 数	54	123	208	100
5 歳	平均時間	2分15秒	3分35秒	5分48秒	2分30秒
	指 数	90	142	232	100

3表下欄は《玩具なし》の継続時間を100として各課題の割合を指数で示したものである。表示のように、《積木》が最長時間で、つぎに《ひも》《玩具なし》《ボール》の順位は、年長、年少とも同じである。つまり、年齢にかかわらず、《ボール》あそびのグループ変動は《玩具なし》のばあいより激しく、《ひも》は《玩具なし》よりあそびが長つづきしており、《積木》はもっとも長時間継続してあそばれ、グループの変動が一番少ないといえる。3歳児と5歳児の継続時間を比較すると、《玩具なし》ではほぼ同じである。他は5歳児の継続時

間が長く、《ひも》《積木》で約20秒、《ボール》では約50秒の開きがみられる。したがって、年長児は年少児よりグループの変動が少なく、あそびの持続時間がながいといえる。

3. グループの形成過程

1) 友だちへの働きかけ

子ども同志があそびのなかでグループをつくるその契機となるのは、行動あるいはことばによる相手への働きかけに他ならない。個人行動の観察から、相手への働きかけ（ことば・行動）をとりあげ、その平均回数を算出した(第4表)。働きかけの回数は3歳児がもっとも多い。これを相手がひとりのばあいと2~4人のばあいとに分けてみると、3歳・4歳・5歳と年齢にしたがって2人以上に働きかけ回数が多くなっていることが明らかである。「協同あそび」は年齢が高くなるほど増加していた(「結果1.グループの形態」および第1表)。そして、働きかけ回数では年少ほど多くなっている。したがって、働きかけがそのままグループづくりになるのではないといえる。しかし、二人以上を相手としての働きかけは、協同あそびにつながっていくことが多いといえよう。友だちへの働きかけを課題別にみると第2図に示されるように、どの年齢でも《玩具なし》を100として、他の課題は60~80にとどまっている。しかし《玩具なし》は、他の課題と比べ、あそびのまとまりがもっとも少ないことは各年齢とも同じである。ここで

第4表 友だちへの働きかけ (一人当たり平均回数)

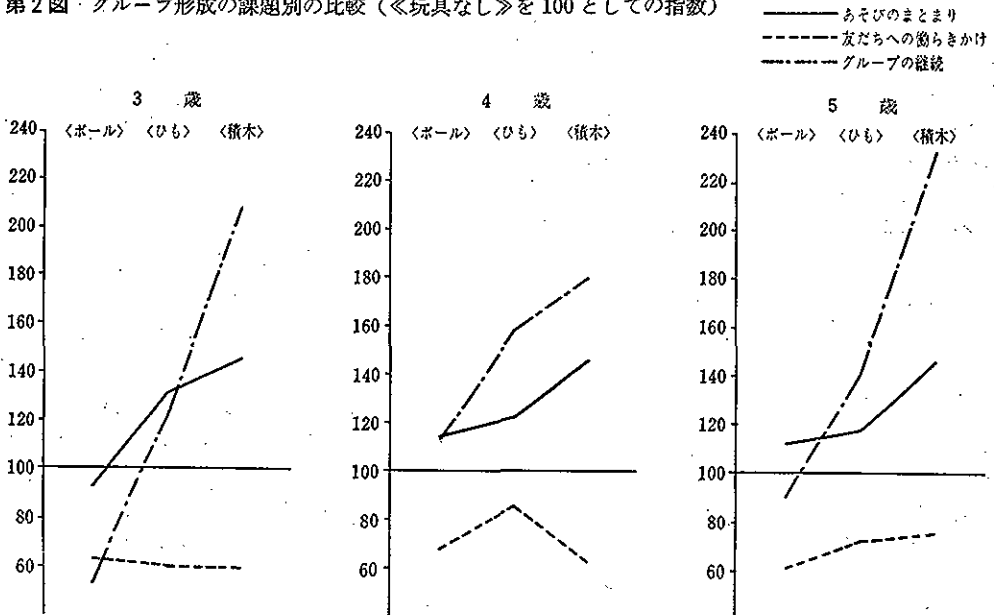
		相手ひとり	2人以上	計
3	歳	42.6	9.2	51.8
	%	(82.2)	(17.8)	(100.0)
4	歳	32.7	8.3	41.0
	%	(80.0)	(20.0)	(100.0)
5	歳	36.0	12.4	48.4
	%	(74.3)	(25.7)	(100.0)

も、子どもたちの友だちへの働きかけが、すべて有効にグループづくりになっていかないことが示されている。なお、第2図の“あそびのまとまり”は、あそんでいない行動—「ふざけ他」と「傍観」を除いたものの集計である。

2) けんか・妨害

子どものグループ形成を阻み、破壊する、つまり集団構成に、マイナスの要素をもつものとして、けんかと妨害を検討する。なお、妨害は、友だちの働きかけを無視するなどの消極的なものから、相手の積木をこわしたりする攻撃的なもの(相手が反撃に出ればけんか)まで含めた。全体の状況観察記録から、けんかと妨害をとりあげ、年少と年長を比較する。第5表がそれである。実験組全体のけんかと妨害を合せた人数を課題別に示したものであるが、3歳児実験組は5歳児実験組の半

第2図 グループ形成の課題別の比較(《玩具なし》を100としての指数)



第5表 けんか・妨害

		ボール	ひも	積木	なし	計
3	歳	52	8	104	26	190
	%	(27.4)	(4.2)	(54.7)	(13.7)	(100.0)
5	歳	59	17	51	12	139
	%	(42.5)	(12.2)	(36.7)	(8.6)	(100.0)

数であり、実数×2となっている。全体でみると、けんかと妨害人数は3歳児が190人、5歳児139人である。実験時間400分であるから、3歳児は2分06秒毎に、5歳児は2分54秒ごとに、集団を乱す行動をしていることになる。この種の行動は年長より年少の方が4割も多くなっている。課題別にみると、3歳児は《積木》が圧倒的に多く55%と半ば以上を占めている。つぎに多いのが《ボール》の27%、ついで《玩具なし》14%であり、《ひも》はもっとも少なく4%である。5歳児は《積木》(37%)より、《ボール》に多く(43%)、あとは《ひも》の12%、《玩具なし》と9%になっている。年少、年長ともにみられる傾向として、《ボール》と《積木》で80%を占めていることである。幼児期のけんかや妨害の原因は、物のとりあい、多いといえよう。

3) グループ形成過程の質的分析

年長と年少のグループ形成のプロセスを比較してみる。課題別にそれぞれ「協同あそび」の数の多い組をとりあげ、3歳児と5歳児のちがいをみとめる。3歳児は「協同あそび」の人数が第1位の組をえらび、5歳児は第2位の組を選んだ。第2位を対象としたのは、前年度に5歳児間のグループの分析で、最下位10位の組と比較して第1位の組をとりあげたので重複をさけるためである。

《ボール》

3歳児No.4

はじめにメンバー②、③、④がボールをとる。⑥が「ワタシナイヨ」と訴える。④「ダメ、コンダケ」とボールが3つだけのことをいっている。⑥「ジャ、バレーボールヤレバイイ」、④「ダメヨ、ヒトリデヤルンダモノ、ワタシ「コーチ」ヨ」とボールをつく(TVマンガの影響でバレーボールのかっこうやことばを知っている)。両手でうまくつけずボールがすぐころがる。①と②なげっこからころがしあい。⑥が③に「バレー」ってコウヤルンダヨ」といい、投げっこ。⑥が「ドコヤッテンノヨ」と⑥を批難する。④は「ワタシモヤロウ」と相手なしに投げて捨てる。そのうちボールをもったまま他を妨害して歩く。①と②、①が床に腰おろし足をひろげて「コ

ン中ニ入レテ」ところがしあい。④が「ミンナ、バレーボールデス」という。⑥が「サッカー」と主張。②「ヒトリデヤンノ」とつく。③と⑤バレーのまね。④と⑥互いにボールを交換する。③と②が、①が上手にできないと内しよばなし「シンチャン①デ、ダメネー」。⑥が「ミニキチャン⑥、ダッテレナイヨ」④が「カズ子チャン③、コレデキル?」とやってみせるがうまくいかない。①が③になげ、③に「コウヤッテスレバトレルヨ」と教える。④と③が①を下手だと批難。⑥「コウヤレバイイノヨ」

こうして、10分間バレーボールをやろうとしては、うまくいかずころがしあいになる繰返してである。自分ではうまくできないが、相手の下手なのは解り、結局①～⑤まで全員が、誰かに批難され、5人それぞれが誰かを批難したり相手に手本(思ったようにいかない)を示したりしている。

5歳児No.1

②と③がボールとる。①が⑤に「ジャンケンデキメヨウ」とじゃんけん。②と③はそれぞれまりつき。②が床にボールをはずませて掌にとる。③と⑥がまねする。①が床に腰おろし足をひろげ、それをゴールにしてさそい、ボールあそびのなにかま入り。③がひとりである④にボールをわたしころがしあい。②⑥④がまりつきになり、③と⑥がボールのとりあいをする。①が「3人で投ゲッショウ」と提案し、投げあい。つぎに①と⑥がボールを蹴ってころがしあい。②③がまりつきし④がみている。

以上のように、5歳児では、ジャンケンでボールを取ったり、ボールをもてるように新しくあそびを考えたり、あそびにはいれない子をさそったりしていることがみられる。あそびも3歳児より長つづきしている。

《ひも》

3歳児No.3

①「チュナヒキ」、②「汽車ポッポダヨ」、①が「ワタチ、チュントウ(先頭)」といい、「チュボ、チュボ」と走る。皆ひもにつながつて走る。①「ヒッカカッチャッタ、持タナイデ、皆オリテ!」「ミニキチャン④ダメ」とひもをはなさせる。④「入レテクンナイノ?」、①「入レレケド、待ッテ、直チュ」とひものひっかかりを直す。そして①がナンバー順に皆をならべる。①「早クナリマチュ」と走ったり、「オチョコナル、ノロ、ノロ」とひとりでリード。疲れると、「ココデ休ムノ、チュトップ」と床に腰をおろし、また歩いたり走りまわったりしている。7分目になり④が実験者に向かって「ズート前ト同ジヤナイ? エイ子チャン①、イナイトキト」という。

(①にひきづられてあそんでいたの、1か月前の同じひもだと気づけなかったらしい)。①「エート、早く廻ルト歌が出シノネ、ユックリダト出ナイノネ」。「アタチ、ヒトリヂャルネ歌ノトキ」と早くなると、ひとりで歌って走る。他の子ひもをもって①に従ってまわっている。①「先頭サン、カワリマシユネ、皆オリテ」というと皆ひもをはなす。④「ツカマンナイデ、エート」と考えている。皆待っている。④が④に「ダマッテヤロウネ」と内しよばなし。

一応は協同の汽車あそびであるが、①に他の4名が初めから終りまでひきづられている。

5歳児No.3.

皆でひものひっぱりっこ。①②③対④⑤。④と⑤「アントタチ3人モイルンダモン」と不満をらす。③が④⑤に味方するが、①に「女ノ味方スルト、女ニナッチャウヨ」といわれ、また男女に分れて①②③対④⑤のつなひき。男の子たちドアの把手にひもをゆわえたりしてなおひっぱりあう。片方が手はずしていっせいにころんだりしながら男3人と女2人でつなひき。ときどき②と③が抜けて傍観する。

時に中断しながらも、男3人と女2人の組みあわせで、大体10分間5人でつなひきをしている。互いに5分5分の力で、勝ち負けの意識もはっきりみられる。

《積木》

3歳児No.3

②「ワタンオウチ」と積木をはじめる。⑤もひとりでつむ。①「三角ナイ？」③と④「アリマス」とわたす。①「コウユウノナイ？ アル人、アレカチテ」と皆にいう。②と⑤が積木のとりあい。皆ひとりづつつくっている。①と④がつながる。二人で「ココ大キナオ家ニナルワヨ」と協同。⑤が③の積木をこわし、③がおこる。こんどは③が⑤のをとる。③と②がいっしょに積みはじめる。①④、②③、⑤の三グループでつくるが積木がなくなる。①が⑤の積木の上に「ノラセテ」とこしかける。⑤「ヤルナ！」とおこる。①と④、②と③がつくった家の中でそれぞれおしゃべり。⑤はフラフラ歩いている。⑤が③の積木を足で蹴る。③「ダメー！ 自分ノアルジャンイカ」、①③④がそれぞれ⑤を批難する。

遊びのはじめ1～2分から、積木のとりあいをしている。まだまだ余分の積木が沢山あるのに。隣り同志の積木づくりが偶然に連結して協同あそびに移行していく過程も明らかである。また、一応積木がなくなると歩きまわったり、おしゃべりしたりして、積木をさらに発展させていくことはみられない。

5歳児No.8

③と⑥が協力して積みはじめる。②、④はそれぞれつくる。①が④のまねをして馬をつくる。②が「ボクノ使ッテイヨ」と③④のなかま入り、さらに、⑥が④をさそって4人で協同してつくる。①と④、またそれぞれに馬をつくって自分で乗っている。④が抜け、③がリーダーで②⑥と3人協同してつくっている。⑥が③に「コワシチャオウカ、イイ？」といい、ガラガラとこわす。⑥は④のもこわす。そして、⑥と④また新しくつくりはじめる。③が①のをこわし、①に叱られながら、前と同じく再現していく。④はひとりで積んでいる。⑥が「デッカク作ロウ！」と皆にいい①②③と4人で馬をつくり、つくった馬にのる。

③と⑥の2人は、はじめから終りまで協同して積木づくりをしている。その間他の子をつなひき、途中で3人になったり、4人になったりする。3歳児とことなり、はっきりした働らきかけでグループづくりしていく過程がみられる。

《玩具なし》

3歳児No.3

①が「鬼ゴッコシヨウカ」と④にいい、他の子も加わり、5人で「ジャンケンポン」。①が③に「ペアデチャヨ」、④に「グウデチャヨ」といい、またジャンケン。①がひとりひとりの手をみて「グー」「チョキ」「パー」を名づけ「マタネ」とジャンケン。三度目に「ア、マケタ、アント⑤鬼ニナンノ」ときめる。(5人でんでんばらばらだが、かまわず⑤を負けとする)。①が「小豆マンマヤロウカ、ハイ手ツナイデ」と皆の手をつながせ、自分が中に入って鬼になる。「小豆マンマ……」と皆でうたう。①が「ムチャムチャッタルノ」と皆にやらせる。「戸棚ノ中ニ入ルトコウッテイウノ」と①にいわれ、皆その通りにいう。①が唄あそびの1節づつをいっては皆にまねさせてあそびを進めていく。終ると「コンド、コノ子ガ鬼」と①が④を鬼にして、また、ひとふしづつ自分が歌って皆にいわせる。つぎに①が「カズエチャン鬼」と三度目の「小豆マンマ煮タッタ……」がはじまる。三度目なので、①の指示を待たずに鬼と他の子のやりとりがすすめられる。途中で①が「コンドチガウ遊ビ」と④、③、⑤、②にひとりづつ内緒ばなし。④が「鬼」という。④が「ワタン鬼」といい、中にはいってしやがむ。「カーゴメ、カゴメ……」と、①が「カズ子チャン」と③をあてる(後の正面ならず前方の子)。そして③を鬼にせず、「トミオ君オニ」と①が⑥を鬼にして、「カゴメ……」。輪

が鬼の外にはずれてしまう。唄が終ると④が鬼の前に出ていって、「ダレ?」ときき、「エノツク人、アタチネ、アタチ鬼ニナル」と鬼になる。

はじめから10分間を通して協同あそびをしているが、④の子が自分勝手にふりまわしている。『小豆マンマ』の唄あそびでは④の助言がいらなくなり、協同のあそびに発展がみられそうになると、④が他のあそびに変えてしまっている。また、ジャンケンをしてからあそびに入る、『小豆マンマ』、『カゴメ』とも間違いなく順にうたう、そして鬼をきめる——と外からみては一見、5歳児と同じあそびである。しかし、ジャンケンで勝負は問題にしないし、鬼をきめるのにもつかまえた子とは別の子を鬼に指名している。年長児のあそびの形だけをまねており、あそびのルールはつかんでいないことが観察される。

5歳児No.3

④が「1番、1番」と他の子に番号札をみせる。皆で自分の札をみたり、おしゃべり。そのうち、皆一方向にぐるぐる走りまわる。④「1番ヲオ忘レナク」とどなりながら。②と③がすもう。④⑤おしゃべり。また5人かけまわる。④が先頭。④が皆に働らきかけ『小豆マンマ煮タッタ……』と唄あそびをはじめ。5分目からはじまり、最後までつづく。

たまたま3歳児とおなじあそびをしているが、3歳児とちがって、各自があそび方を知っており、つかまえた子を順に鬼にしていくルールも守られている。

IV 考 察

以上の結果を総括しながら、玩具の特性が子どものグループ構成にどのような影響を与えるかを発達の観点から考察する。

1) あそびの形態からみると、3歳と4歳では、どの玩具でも5%の有意水準で、4歳児の方がよくあそんでいる。4歳と5歳を比較すると『ひも』の他はすべて有意差をもって4歳児より5歳児のあそびのまとまりがよくなっている。つまり、全体を通して、3歳より4歳、4歳より5歳と年齢が高くなるにつれあそびが発展しているといえる。

2) グループの構成人数では、『積木』と『ボール』が年長児になるに従い人数の多いグループをつくっている。これに対し『玩具なし』は、逆に3歳児に5人グループが多く、5歳児は2～5人グループに分散し、4歳児はその中間的傾向である。『ひも』は各年齢とも4・

以上でみるように、3歳児と5歳児では集団形成に大きなちがいがみられる。数量の検討のさいには、差のみでなく『ひも』や『玩具なし』でも、質的には程度がちがう「協同あそび」であり、密度がちがうグループ構成であることが明らかである。第1に、3歳児はひとりの子にひきづられて遊んでおり、5歳児のように、ひとりひとりの子が自分の役割をもって協力しているグループでないといえる。この点は、5歳児のまとまって遊んでいる第1位は玩具のちがいで各組に分散し、リーダーも玩具によって入れ替わっていたが、3歳児はひとつの組(No.3)に偏っており、リーダーもNo.3の④の子に限られていることでも明確である。第2にいえることは、3歳児と5歳児の自我意識の発達差である。3歳児は、自分を他者の目でみることが出来ず、自分がうまくできないのに、相手を責め、自分の手もとに同じ積木があるのに、他の子のもっているものを欲しがっている。また、ジャンケンの勝ち負け、鬼の選定なども、その行為そのものに満足しており、ルールのない矛盾に誰も気づいていない。5歳児の協同のあそびとくらべて、3歳児は平行あそびに近い段階で協同あそびをしているといえる。第3に、3歳児と5歳児のあそびの技術的能力の差があげられる。ボールを思ったように投げとりできず、なわをうまくとべず、積木を数多くつかえないことが、3歳児のあそびの継続時間を短くしており、また、相手への働らきかけが多くてもグループづくりに発展できないことにつながっていく。

5人の多人数グループに偏っている。すなわち、『積木』のように質的に高度で継続時間も長いグループは、年少児ほど小人数の構成になるといえる。そして、『ひも』を媒体に連結していくようなグループは、3歳児でも5歳児とおなじ多人数グループをつくることのできる。『玩具なし』のばあい、グループの質的分析でも明らかのように、年少児は特定の子にひきづられて多人数グループをつくっているといえよう。

3) グループの変動をみると、変動の激しい順に『ボール』『玩具なし』『ひも』『積木』となり、これは3・4・5歳児とも同じ順序である。それぞれの平均時間は、年長児が長く、とくに『ボール』は3歳児より5歳児が1分近く継続時間が長い。つまり、子どものつくるグループは年少ほど崩れやすく、遊び時間も短かといえる。しかし、玩具によるグループ継続時間の長短は年少

から年長まで同じであり、集団構成が玩具の特性に規制される一面を明確にしている。

4) グループ形成の契機となる子どもの他の子への働らきかけは、頻数だけでみると3歳児がもっとも多い。これを相手ひとりと2人以上に分けてみると、年令とともに2人以上に働らきかけるのが多くなる。玩具別にみると、どの年令でも《玩具なし》がもっとも多い。働らきかけの頻数は3歳児が多いのに3歳児は協同あそびがもっとも少ない。また、《玩具なし》が働らきかけが多いのに遊びのまとまりがもっとも少ない。したがって、相手二人以上への働らきかけはグループ形成と比例していくが、相手ひとりへの働らきかけは、むしろグループ形成ができないばあいに多くなるということもできよう。

5) つぎに、グループ形成の否定的側面(けんか・妨害)から検討してみる。けんか・妨害は年長児より年少児の方が4割も多い。年少児は《積木》に、けんか・妨害がもっとも多く、年長児は《ボール》が一番多い。年長・年少とも《ボール》と《積木》をあわせて、けんか・妨害の80%を占めている。すなわち、けんかや妨害は年少児ほど頻繁に表われ、その行動の殆どは年長・年少を問わず玩具のうばい合いといえる。3歳児は数の少ない《ボール》より《積木》にうばい合いが多いが、これはなぜだろうか。3歳児は、ボールを上手に扱えず、すぐボールが転々として相手に奪われることになるので、ボールを抱きかかえているだけのことが多い。また、3才児はボールを最初に持った子の私有物と見られしく、たまたま転がってきたボールも拾って持主(?)に返すことがいく度か観察されたのである。そして《積木》では、手許にまったく同じ形、同じ大きさの余分の積木があっても気づかず、他の子の持っているものを欲しがっているのである。そうしたことが《ボール》より《積木》に3歳児の妨害行動を多くしているといえる。そしてまた、年長児にはありえないこれらの原因で3歳児のけんか、妨害が数多くなっているともいえる。

6) グループ構成の経過をみると、年長児と年少児とのグループに大きな違いがみられる。3歳児の自我意識の未分化、能力の未熟さが、4～5歳児のグループとことなる3歳児特有のグループをつくっている。まず、3歳児のばあい、自分を他者の目で見ることができないので自分の失敗を相手の失敗にしたり、お互いの関係、集団と自分の役割の意識があいまいで、ジャンケンや鬼をきめることなどその形式だけに満足してルールがない矛盾に気づいていない。したがって5歳児グループと比べてみると、3歳児の協同あそびは互いの協力が弱く平行あそ

びに近いのである。つぎに、能力の面では、3歳児はボール投げ、なわとびがうまくできない、5人のジャンケンができない、積木を数多くつかえない、——と5歳児との開きが大きい。したがって3才児のグループは継続時間が短かく、すぐ崩れてしまう。それでいながら、「こうしたい」という行為へのイメージを持っていることは明らかである。なぜなら、年長児の遊びの形を模倣してそれらしく遊び、さかんに相手に働らきかけ、自分の行為は見えないが相手のわが意に染まない行為を批難しているのである。また、3歳児のグループは特定の子にひきづられて連なっており、5歳児のように玩具によってリーダーが交替することはみられない。これは3歳児と5歳児グループの質的な面での偏りの大きさを示している。

以上、子どもの集団構成と玩具の関係を、子どもの発達という観点から考察してきたのであるが、この結果、結論はつぎの2点に集約される。

1) 集団構成は、3歳と4歳、4歳と5歳に各玩具とも有意水準0.5%以下で差がみられ、年令とともに発達している。とくに3才児は、運動能力の未熟により玩具を思うように扱えないこと、自我意識の未分化からグループ編成が不安定であることを要因として、4～5歳児とかなり違いがあり、質的に低い段階のグループ構成であった。

2) 玩具の特性による集団構成の変化は、3歳、4歳5歳児とも同じ傾向である。したがって、昨年度の5歳児によって得た結論は、幼児期一般にも妥当な指標として考えてよいことがここに改めて確認されたともみてよいであろう。すなわち、《ボール》は転々として集団を頻繁に変え、その流動性は、固定しがちな子どものなかまグループに新しい集団形成の刺激を与えることができる。《ひも》は連鎖的刺激として集団づくりをさそい出し、他の玩具に比べて年少児と年長児の集団構成の差がもっとも少ない。このことは、集団参加に劣る子や年少児の集団形成の誘導に《ひも》のように連鎖的刺激をもつものが適しているといえる。《床上積木》は他の玩具に比較して最も緊密なグループをつくり、さらに次第に集団が発展していくことに特徴がみれた。《床上積木》に代表される協力して構成していくようなものは集団の質を高めていく役割をもっている。

玩具の特性は、それぞれ独自の遊びを誘発するだけでなく、集団の構造的な特性を規定していく。したがって、保育場面でもこの観点に立つ玩具の活用を配慮すべきであろう。

The Role of the Toys that affect the Grouping of Children —Chiefly considering Children's Development—

Dept. 8 Michiko Hoshi
Reiko Yukawa

The purpose of this study is to investigate the special qualities of the toys that regulate the qualities of the grouping of children so that it may serve as the basic materials for the utilization of the toys in the nurseries and kindergartens.

The experiment last year with the children of 5 years old showed that the grouping changed with the special qualities of the toys. This year another experiment was conducted using the children of 3 and 4 years old, and the results were compared with those of last year to see the difference among the groups of the older and the younger children.

Exactly the same method was employed: each group was indiscriminately composed of 5 children, and each group was observed for 10 minutes 4 times at some intervals while the members were playing, changing the toy each time.

The experiment was made under the following 4 conditions: using 1) 3 balls for giving flowing stimulus to the group, 2) a 5 meter rope for giving connecting stimulus, 3) one set of building blocks for giving uniting stimulus, and 4) no toys. Of 2 experimenters, one kept on recording the behavior of one child, while the other observed the change of the whole group, recording at every 60 seconds the relation between the toys and each child's position.

The results were:

1) Difference at below 0.5% level of significance was seen in grouping using each toy between the group of the children of 3 and 4 years old and the group of 4 and 5 years old children, and the development was seen with the advance of age. Especially, the children of 3 years old showed lower level of grouping because they could not manipulate the toys as they liked due to immature motor ability and grouping was unstable due to their undifferentiated self-consciousness.

2) The same tendency was seen in the change of grouping affected by the special qualities of toys in all the groups of the children of 3, 4 and 5 years old. Therefore, it may be considered that the conclusion drawn from the experiment conducted with 5 year-old children last year was confirmed as the valid index for the infancy in general. As «the balls» move around constantly, they can frequently change the playmate and stimulate those children apt to be stationary. «A rope» induces grouping, forming a connecting link between a group and children. The difference in grouping was least seen in playing with «a rope» among the groups of the older and the younger children comparing with the cases of other toys. It may be said that «a rope» is suitable for grouping younger children and those who are poor at joining a group. «The blocks» form the closest group compared with other toys and be useful for developing the quality of a group.

The special qualities of the toys not only induce individual, independent plays but also regulate grouping qualities. The toys, therefore, had better be utilized from such a standpoint in the nurseries and kindergartens.